

じたことではなくして、却つて東方諸民族が進んで自から漢文化に同化することに勉めたものであると見ることに於て、始めて解釋を得べきことであると思ふ。

凡そこれらの東方諸民族が支那と接觸した時の有様を考へて見るのに、その何れの民族を見ても文化の發達の程度は著しく漢文化に比して劣つてゐたものであることは、これを史上の事實に徴して争ふことは出來ない。滿洲の野に彷徨した女真民族滿洲民族と北宋や明の文化、盛樂に據つた鮮卑族の文化と中原の文化、朝鮮半島南部の三韓の文化と漢文化との如きを對比して考へるならば、その間に逕庭の大なるものあつたことを認めぬ譯にはゆかない。實に東方亞細亞の地域に於ては、近時に至るまで支那に匹敵し得べき程の高い文化の發達を遂げたものは無い。従つて支那以外の東方諸民族の最高標準とすべき文化は漢文化に外ならなかつたのである。そうすれば此等低級文化の民族が、この最高標準と仰いだ漢文化を見てこれに倣はうとするのは誠に當然の趨向であつて、一步でもこれに近づぐことを以て誇とし、益々進んでこれと同一程度に達することを理想として努力することもまた當然の儀といはねばならず、これを實證する史實は今こゝに列擧するまでもなく、幾らでも史上に明示せられてゐることである。そうして此の當然の趨向の前には、漢民族に不思議にも特種の同化力が有らうが無からうが、實は大した問題ではないのである。

かゝれば所謂同化作用なるものは要するに大體に於て漢族自からが營んだことではなく、却つてこれに同化しようとする諸民族が、自から進んで營んだものに外ならぬ。支那に入つて國を建てた民族で、さほど支那の文化に